



音声訳グループこだま
代表 那須 末治 さん
(泉ヶ丘)

目の不自由な人にまちの情報を届けたい

目の不自由な人の「目の代わり」となって、まちの情報を正しく伝えることが私たちの役割です。ストレスなく安心して聞いてもらえるよう、内容のわかりやすさと聞きやすさは全員が常に意識しています。

こだまのメンバーは、音声訳の経験年数が約2年〜20年とさまざまです。言葉のアクセントやパソコンでの編集など難しいところもありますが、勉強し、互いに意見を交わしながら取り組んでいます。利用する人の「ありがとう」という言葉が原動力。読むことが好きで、一人一人が活動を楽しみながらも、誰かの役に立ちたいという思いと情熱で動いています。

音声訳について知らない人も多く思うので、もっとたくさんの人に知ってほしい。視覚障がいのある人に限らず、高齢になって、小さな文字を読むのがつらい人もぜひ利用してほしいですね。

音声訳グループこだま

ボランティアで広報こうし、議会だより「きずな」、社協だより「ほっとライン」の音声訳を行なっています。また、グループホームなどで紙芝居の読み聞かせや、視覚障がい者協会主催の料理教室のサポートなども実施。

メンバーの中には、点字図書館で小説など年間10冊以上の音声訳をしている人もいます。



音声訳グループこだまの皆さん

音声訳CDは こうして作っています

今回はこだま1班の皆さんが行なった広報こうし4月号の音声訳に密着！

役割分担・打ち合わせ



誰がどのページを読むか役割分担。打ち合わせをして目次情報をパソコンに入力します。



自分の担当ページには印を！

2

原稿の下読み



録音の1週間前から自分の担当ページを読み込みます。内容が聞き手に正確に伝わるよう一つの言葉の意味や意図、書き手の思いを考えて音読を練習します。

次のページにつづく！



どのように読めばいいか迷ったところは互いに相談。



間違えやすい漢字は読み仮名をふるなどひと手間を加えます。

声 で届ける 情報とぬくもり



視覚障がいとは

まぶたを開けば目の前に広がる景色。しかし、物が見えることは、全ての人にとって必ずしも当たり前前のことではありません。

病気や老化など原因はさまざまですが、眼鏡をかけても一定以上の視力が出ない、視野が狭くなって人や物にぶつかりやすいなど、生活に支障を来している状態を視覚障がいといいます。本を読んだりテレビを見たり、多くの人が普段当たり前のように楽しんでいることも、視覚障がいによりスムーズに行なえないことがあります。

音声訳ボランティア

音声訳ボランティアは、視覚障がいのある人のために書籍や雑誌、広報紙、新聞などの内容を音声にして伝えるボランティアです。

本市では平成8年、旧合志町・西合志町両町の社会福祉協議会の呼び掛けにより、音声訳を行なうボランティアグループが誕生しました。現在は「こだま」というグループ名で活動し、広報こうしや議会だより、社協だよりの音声訳を毎月行なっています。